

## 生命山シュバイツァー寺を訪れて

おやさと研究所教授  
金子 昭 Akira Kaneko

## 遺髪授受 40 周年法要

熊本県玉名市に、シュヴァイツァー (1975 ~ 1965) の遺髪を祀る宗教法人・生命山シュバイツァー寺がある\*。

本年1月16日に「シュバイツァー博士ご遺髪授受40周年法要」が開催され、私も参列させていただいた。遺髪は本堂正面にある金色の多宝塔内に安置されており、現在は拝観することはできない (写真は展示されている)。

法要では、導師による法華経読誦の後、参列者全員による焼香が行われた。その後、会場を裏山 (境内地) に移しての記念植樹式では、イチジクの苗木を植えた。イチジクは花が咲かないのに実を結ぶことから「命の木」とも呼ばれ、シュヴァイツァーの生命への畏敬の思想を象徴する樹として選ばれた。法要の間には、横笛奏者の鯉沼廣行氏が和笛で献曲され、厳かな雰囲気醸し出した。

シュヴァイツァーの遺髪は、「福岡事件」の死刑囚の冤罪を訴え、その助命再審運動に取り組んでいた古川泰龍師 (1920 ~ 2000) が、1969年に神戸シュバイツァー友の会の向井正代表により、博士の人道精神を継ぐべき人だとして譲り受けたものである。泰龍師は1973年に現在地で生命山シュバイツァー寺を設立、宗教法人の認証を得た。

シュバイツァー寺は大乗仏教を宗旨とする超宗派の単立寺院である。家庭僧伽 (共同体) を守り在家仏教を標榜する。とくに檀家は無く、信者の支援で運営されている。1987年には、カトリックの神父との出会いを通じ、宗教間対話の道場として、生命山カトリック別院も設立された。このように、宗派・宗教の別を超えた交流を進めているのも、同寺の特徴である。現在は、泰龍師の長男の古川龍樹師が代表を務めている。

## 遺髪授受の経緯とその思想

私はシュバイツァー寺の存在は20年前から知っていたが、今回、オーストリア人の映画監督のG・ミッシュ氏がシュヴァイツァーのドキュメンタリー映画を作製することになり、私も取材協力という形で、初めて同寺を訪問させていただくことができた。

シュヴァイツァーの遺髪は、彼の最後を看取った秘書アリ・シルバーを通じて向井氏の手に渡ったものだという。遺髪は、我が国ではもう一か所、玉川学園教育博物館にも所蔵されている。こちらは、ランバレネの病院で彼の晩年8年間にわたり勤務した高橋功医師のコレクションである。実は向井氏と高橋医師は親しい間柄であった。向井氏所蔵の遺髪も高橋医師経由のものかもしれない。

ミッシュ監督がシュバイツァー寺に関心を持ったのは、仏教の寺院がキリスト教のシュヴァイツァーを聖人と見なし、その遺髪を礼拝の対象にしていることからだった。シュヴァイツァーはルター派のプロテスタントである。プロテスタントではカトリックでいう「聖人」は認めないし、聖遺物崇拜も厳に戒められている。ヨーロッパ人の感覚では、シュバイツァー寺は不思議な存在に思えるのかもしれない。

私自身も、当初はそのように感じていた。けれども、大乗仏教では本来、一人ひとりの心には皆、仏性 (仏になる種) があると見ている。その仏性を最大限に発揮し、苦しんでいる人々

のために尽くしたシュヴァイツァーはまさに人間菩薩にほかならない。事実、我が国では、彼は「密林の聖者」として喧伝されていた人物である。そうした聖者の遺髪を拝むのは、仏教者としてはけだし自然なことではないだろうか。また仏教者ならずとも、こうした感性は日本人ならだれもが有していると思う。

しかしながら、彼の遺髪が礼拝の対象になっているからといって、それは決して偶像崇拜や聖遺物崇拜だというわけではない。私がシュバイツァー寺で受けた印象では、遺髪は同寺を挙げて展開している死刑囚再審運動の根本精神が託された霊的シンボルのように思われた。本尊として祀られているのは、むしろ中国から請来した観音菩薩像である。この像は正面中央に安置されている。

重要なのは、思想的なつながりのほうである。生命への畏敬は仏教でいう不殺生の戒めとも通底するものがあり、東洋思想についての彼の造詣は、通常思われているよりもずっと深い。それは近年刊行された彼の遺稿集を読めばよく分かる。

また、シュバイツァー寺が実践している宗教間対話や宗教間協力の試みなども、宗派・宗教間の教義の相違に囚われないシュヴァイツァーの宗教哲学思想と深い関連性を持つものである。彼の故郷のギュンスバッハの教会はプロテスタント兼カトリックの教会であり、シュヴァイツァーも幼いころからその中で寛容と融和の精神を育んだのである。

## 街頭こそがわが寺

古川泰龍師はシュバイツァー寺を「無実死刑囚助命托鉢の寺」と位置づけ、この寺は街頭でなければならないと考えていた。「坊主のいるところが寺で、坊主がいないところは建物が寺でも寺でない」というのが、泰龍師のモットーであった。現在にいたるまで、実に半世紀にもわたり、泰龍師とその家族が一丸となって福岡事件の再審運動に取り組んできたのである。現代表の龍樹師は、死刑制度そのものの問題についても超宗派的な反対運動の取り組みを行っている。

シュバイツァー寺の活動は、まさにシュヴァイツァーの生命への畏敬の精神と仏教の菩薩道精神との現代における一つの融合である。シュヴァイツァー自身も死刑制度には反対であった。彼は晩年の手紙の中で死刑制度の問題に触れ、「我々には人間を殺す権利はない。我々にあるのは、人間から自由を奪う権利だけである」と述べている。

もし彼が今日この世に現われて、シュバイツァー寺で自分の遺髪が礼拝されているのを見たとしても、それが大乗仏教の様式で祀られた生命への畏敬の霊的シンボルだということに十分に理解を示すだろう。そして何よりも、自らの生命への畏敬の思想に対する具体的実践として、寺を挙げて展開している死刑囚再審運動や死刑制度反対運動には、賛同を惜しまないであろう。

このように、生命山シュバイツァー寺は、独自の社会的実践活動を通じて、現代社会における宗教のあるべき姿を主張し続ける超宗派の仏教寺院なのである。

\* Schweitzer の現行の日本語表記は、シュヴァイツァー、シュバイツァー、シュワイツァーと、必ずしも一定していない。私は地の文ではシュヴァイツァーとしているが、シュバイツァー寺やシュバイツァー友の会は固有名詞でもあり、その表記法を尊重してそのまま使用している。